

鳥のこゑ

松岡隆子

歳旦の高きに透くる鳥のこゑ
初夢の目覚めの息のやはらかき
なにはとも夫の息災なづな粥
指先に夕風染むる松納
初釜の薄日にくぐる躡り口
辻占の言葉見せあふ小正月
恋札は少女にゆづる歌かるた

記念樹の冬芽の赤さことのほか
笹鳴を離れてよりは当て所なく
一木の枯の高さを退り見る
山茱萸の幹の剥落春遅々と
待春の堤の果てのけぶらへり

先日思い立って一人吟行に出かけた。目的地はかつて「朝」吟行会で訪ねたことのある多摩湖。調べてみると昭和56年3月、創刊間もない頃だった。何と吟行会記は松岡隆子記とあり、参加者43名の中に木内憲子、八木下巖（末思）お二人の名前がある。先生も私たちも若かった。辿り着いた多摩湖は青いドーム屋根の取水塔も北へ延びる長い堤も記憶のままだった。そここに鴨が遊泳している湖は記憶以上に広がった。湖岸に沿ってひたすら歩いているうちに駅への道を見失った。記憶の時間に埋没したかのような三時間だった。